白石加代子さんは、なんと器の大きな女優だろうか。
虹色の声で老若男女を語り分け、台詞の間、表情、身振りで物語の世界を立ち上らせる。
舞台上にはたった一人しかいないのに、物足りなさは全く感じさせない。
幕開きの「ちょうちんが割れた話」の演出に驚かされ、「如菩薩団」はブラックユーモアの裏にある人間の業を考えさせられた。「箪笥」は味のある語り口に引き込まれ、「おさる日記」では会場と一体になってケラケラ笑った。終演までの時間はあっという間だった。とにかく面白かった。
不思議な話をおどろおどろしく語るのではなく、軽やかに聞かせる手腕は相当なものだろう。
女優としての類いまれな力量、センスもさることながら、白石さんの人間性が「百物語」に奥行きを与えているのではないか、と思い至る。
生きとし生けるもの、そして、生きていないものさえも包み込む、懐の深さをひしひしと感じるのである。
そこへ、演じる喜び、作品への敬意、観客へのサービス精神が加わり、極上の舞台が出来上がる。
白石さんの「百物語」がずっと愛されてきたことに、深く納得した一夜であった。
劇場からの帰り道は、心がぽかぽかしていた。

読売新聞大阪本社文化部　淵上えり子記者